

# 对人的接近—距離化スキルの機能

## —相手との関係性別分析—

教育心理学コース 石 井 佑可子

The functions of interpersonal approaching/distancing skill

Yukako ISHII

Traditional social skill studies have treated only Positive (so-called desirable) Communications such as assertion and relational maintenance as social skills.

However, under the circumstance of real life, we often use Negative-Communications including deception, lying, and avoiding, as useful communication tools. To reconsider the definition about social skills and the possibility of Negative-Communications to be social skills must be examined.

In this study, I did the questionnaire investigation about the relationship between social adjustments and social skills including “inter personal Distancing skill” via Negative-Communications which include lying, deception, and avoiding and “Interpersonal approaching skill” via positive communications. 284 male and female participated to the survey (mean age was 22.5).

The result of ANOVA, the main effect of approaching skill to social adjustments was significant positively, while the main effect of distancing skill to them was significant negatively. However, there were some interaction effects. When meta-cognition about one's communication situations were exerted, using distancing skill reduced negative emotions. Moreover, only against middle intimate partner, using distancing skill related to high positive emotion.

## 目 次

- 1 問題と目的
  - 1-1 社会的スキルと社会的適応
  - 1-2 社会的スキルの弱点・課題点
  - 1-3 測定対象になっている社会的スキル
  - 1-4 現実場面に即した社会的スキル
  - 1-5 「メタ・ソーシャルスキル」概念の提案
  - 1-6 本研究の目的
- 2 方法
- 3 結果
  - 3-1 親密性高条件
  - 3-2 親密性中条件
  - 3-3 親密性低条件
- 4 考察

## 1 問題と目的

### 1-1 社会的スキルと社会的適応

コミュニケーションの巧拙を決定する概念として、社会的スキルを挙げることができる。社会的スキルは

研究者間で統一された定義がないまま研究が進められてきた（Spitzberg, Cupach, 1998；相川，2000などに定義の一覧）。これまでの定義は大まかには行動側面を強調する立場，能力的側面を強調する立場，過程と捉える立場に分かれていたが，現段階では階層・処理過程（相川，2000など）での理解が一般的とされている。

従来研究では，この社会的スキルを高く有していることが単なるコミュニケーションの円滑さのみならず，仕事面での誠実さ・職務遂行能力・給料（Witt & Ferris, 2003），CMCでの精神的健康（五十嵐，2002），学業成績（Hall & Gaeddert, 1960）など人生の様々な面での適応的な結果とつながるとされており，反対に社会的スキルの不足は，精神的健康の阻害（Argyle, 1967など），抑うつ（Segrin & Abramson, 1994など），孤独感（相川，2000；和田，1991など）など，様々な不適応状態と関連すると報告されている。さらには精神遅滞の子ども（Doll, 1953）や学習障害やアスペルガー症候群の人々における社会的スキルの問題（Whitehouse, Chamberlain & O'brien, 2001など）も指摘され，今では社会的スキルそのものが適応の指標の

ように取り扱われている。

### 1-2 社会的スキルの弱点・課題点

ただし、全般的な社会的スキル研究やその獲得トレーニングであるソーシャルスキルトレーニング (SST) の弱点として、生態学的妥当性の低さが指摘されている (相川, 1999 など)。SST の効果について、研究者達は短期間の行動変容には効果を認めているものの、効果の維持や日常生活への般化に関しては疑問が残るとしている (Marzillier, 1978; Trower, 1995 など)。また大学生を対象として調べた実験研究によると、社会的スキルの高低は長期に持続する対人関係には意味を持たないことが示唆されている (木村・磯・大坊, 2004)。つまり現在のところ、社会的スキル及びその獲得トレーニングはその場限りの一時的な効果を持つものにとどまってしまっており、現行の概念や測定法では実生活での適応的対人行動を網羅できていない可能性が伺える。長期的に、かつ一般生活に自然な形で効果を持つ社会的スキルを検討することが課題として残されているといえよう。

### 1-3 測定対象になっている社会的スキル

ここで、社会的スキル研究が想定しているスキルについて把握する為に、従来研究で社会的スキルの測定に使用されている自己報告式尺度の構成因子に注目すると、Kiss-18 (菊池, 1988) では「問題解決」「トラブル処理」「コミュニケーション」、ソーシャルスキル尺度 (和田, 1991) では「親密関係維持」「関係開始」「自己主張」、ENDE 2 (堀毛, 1994) では「解説」(相手の言いたいことが分かるなど)「統制」(気に入らなくても態度に出さないなど)「記号化」(会話をうまく進めるなど)といった因子構造になっている。その定義と同様、それぞれの尺度が重視する面にもばらつきが見られるが、全般的な共通点として、スキルとして取り上げられるのは、表出がポジティブな“望ましい”スキルである、ということが挙げられる。また、測定方式としてどれも項目毎にその度合いを尋ねているが、そこからはスキルの行使頻度が高いほどスキルが高く、結果として社会的適応と関係すると想定しており、スキル行使の際の状況要因については特に考慮していないことが伺える。

前述したとおり、現在では社会的スキルを処理過程として捉える立場が主流であり、単なる個別のパフォーマンスだけではなく状況認知を組み込んだ処理過程全体とする立場 (相川, 佐藤, 佐藤, 高山, 1993 ;

相川, 2000 など) や、階層性を持つと捉える立場 (大坊, 2008 など) からモデルや定義が複数提案されている。つまりスキルの実際行使のみではなく、対人関係状況の読み取りやスキル選択を適切に行う段階へも注目することが重要だと主張されているわけであるが、こうした指摘は定義やモデルの議論段階に留まっており、実際に採用されている測定手法の強調点とは矛盾していることになる。このような測定の偏りが前述したような実生活との乖離につながっているのかもしれない、現実生活や定義に即した社会的スキルの内容を再考した上で、行使プロセスを含み込んだ測定及び研究の実施が必要だといえる。

### 1-4 現実場面に即した社会的スキル

そこで、実際の生活に即して考えてみれば、多様なスキルをポテンシャルとして有し、状況の特質によって保持するスキルの中から特定のスキルを適宜行使したり、時には行使できることを知りながらも敢えて用いなかったりできることの方がより重要な要素かつ自然な振る舞いとも考えられる。さらに、時にはこれまで望ましくなく“ネガティブ”とされてきたコミュニケーションスタイル (例えば、害悪をもたらしそうな相手に対して関係をこれ以上維持しないように仕向ける、争いを避けるために、できたとしても反論を行わないなどの行動) を“敢えて”選択することが本人の精神的な健康及び相手との関係にとってよりよい結果を生む場合も予測できるのではない。

実際、ネガティブなコミュニケーションスタイルが、状況によっては適応的な振る舞いになる場面もいくつか指摘されている (欺瞞 (Depaulo, Kashy, Kirken-dol, Wyer, & Estein, 1996; Murai, 2000), 回避 (畑中, 2003; 原田, 1998), 攻撃や怒り (Tedeschi, 1983; Holt, 1970; Canary, Spitzberg, Semic, 1998) など)。

また、社会的スキルが高い人は常に状況を察知して適切な反応をするための情報を得る (Hargie, 2006) ことやセルフモニタリングが高い人ほど、社会的スキルが高く (Snyder, 1974, 1987 など)、より効果的な交渉ができる (Jordan & Roloff, 1997) などといった状況の認知と社会的スキルの関連や、状況に応じたコミュニケーションスタイルの変化 (ポライトネス理論 (Brown & Levinson, 1987 など) が既に明らかになっており、適切なスキルが状況によって変化する (Argyle, 1967; Hargie, 1986 など多数) ことは通念となっている。

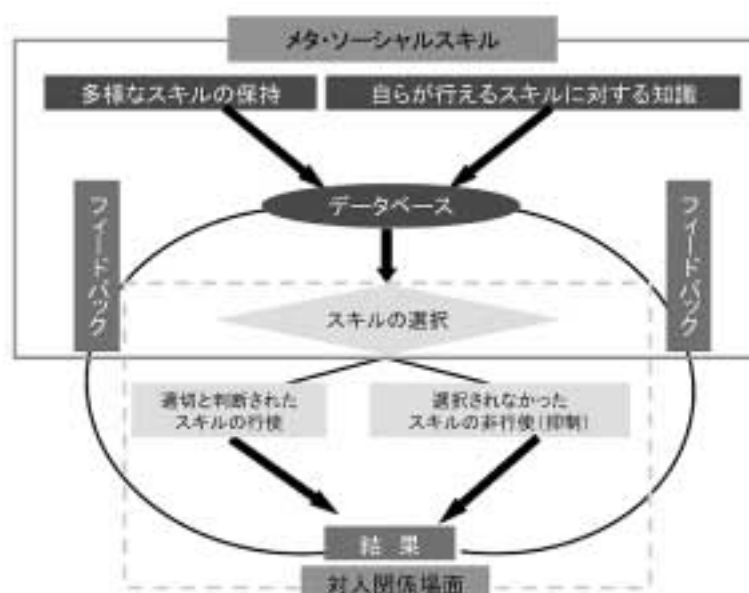


Figure 1 「メタ・ソーシャルスキル」モデル図

### 1-5 「メタ・ソーシャルスキル」概念の提案

上記の点を踏まえて石井（2006）は従来の社会的スキル概念を補強し、社会的適応をよりよく説明する概念として、「メタ・ソーシャルスキル」（社会的スキルや対人関係状況のメタ認知・それに基づくスキルの適切な選択的行使・非行使決定に拘わるスキル）を提案した（Figure 1 にモデル図）。

「メタ・ソーシャルスキル」概念では、ネガティブコミュニケーションの社会的スキルとしての可能性、社会的スキル行使時における対人関係状況や自らのスキルに対するメタ認知、状況の把握に応じたスキルの使い分けを強調している。

また、測定に際しては前述の指摘を踏まえ、メタ認知に関する尺度と、スキル行使に関わる尺度の二尺度からの測定を試みている。メタ認知尺度に関してはスキル行使時の状況判断について、社会的情報処理モデル（Dodge, 1986）を参考に、コミュニケーション状況や相手との関係性の把握、自らのスキルレパートリーについての知識などを問う内容になっており、ソーシャルスキルの測定については項目に、従来の社会的スキルと重複する、自らの心情を素直に吐露し、関係を維持させていく対人的接近スキルに加え、これまで社会的スキル測定では取り上げられてこなかった回避や欺瞞を含む、内面の気持ちを正直に表明しない、関係を終息させるコミュニケーション行動からな

る対人的距離化スキルとの二側面から測る尺度を作成している（石井, 2007）。さらにこの対人的接近—距離化スキル尺度では、スキル行使時の状況要因の検討として、各項目のスキル行動の受け手として親密性が異なる相手を3種類設定し、それぞれの相手に対する行使程度を問う形式をとり、相手に応じたスキル行使の調節傾向を測定するよう試みている（Figure 2）。

1 意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる	普段どの程度行いますか。
親しい人が相手の場合 ……………	全く—あまり—たいてい—いつも
中くらい親しい人が相手の場合 ……	全く—あまり—たいてい—いつも
親しくない人が相手の場合 ……	全く—あまり—たいてい—いつも

Figure 2 スキル尺度回答形式

この尺度を用いて、コミュニケーションに困難があるとされてきた非行少年を対象にした調査では、対照群と比較すると非行少年らは対人的接近スキルが有意に高く、メタ認知や対人的距離化スキルが有意に低いことが分かっており（石井・新堂, 2011）、従来型のポジティブコミュニケーション由来の社会的スキルだけでは対人関係上の問題を把握することが出来ないこと、加えてメタ認知や対人的距離化スキルの不足が実生活において大きな問題になりうることが示唆されて

いる。

### 1-6 本研究の目的

ただし、これまでの調査はメタ認知や各スキル行使と社会的適応の指標との関連を単独で個別に検討しているのみであり、それぞれのスキルが行使される際に、メタ認知がどのように関わっているのかについては明らかになっていない。「メタ・ソーシャルスキル」概念に従って考えるならば、スキルの行使は、その場でのメタ認知を高く働かせた上で（時には“敢えて”）実行された時に、最も適応的に機能すると予測できる。

そこで本研究ではメタ認知とスキル行使の交互作用を想定し、各スキルと社会的適応との関係を考察することを目的とする。また、状況要因としてスキル尺度に設定されている相手との関係性別条件も含めて吟味することとする。

今回は社会的適応の指標として、自尊感情と日常事態での情動経験傾向を用いた。

情動経験はそれ自体が社会的適応の指標とは考えにくいですが、日常的情動経験は評価値が多様であり、喜びや興味といったポジティブな情動状態が生活満足感などの種々の望ましい状態や、パーソナリティにおいては外向性的や神経症的傾向（負の方向へ）を予測し、恐れや怒りといったネガティブ情動が神経症的傾向を予測することが報告されている（Izard, Libero, Putnam, Haynes, 1993; Lyubomirsky, King, Diener, 2005; Kuppens, Realo, Diener, 2008 など）ことから、well-being および不適応の指標として有用であると考えられたためである。

## 2 方法

### 調査対象者

18歳～35歳の大学生・大学院生男女284名（男性101人、女性183人、平均年齢 22.5歳）。講義時間中等に質問紙を配布し、調査への参加を依頼した。

### 質問紙の構成

1 対人的接近－距離化スキル尺度…石井（2007）の表出－非表出スキル尺度による。項目内容は同一だが、より内容に沿った因子名を再考した結果、対人的接近－距離化スキル尺度と改名された（石井ら、2011 など）。社会的スキルを測るもので、従来の所謂ポジティブスキル（対人的接近スキル）だけではなく、こ

れまで見過ごされてきた「望ましくない」（意見が合わなさそうなときに何となくかわりを避けて話をうやむやにするなどの）スキル（対人的距離化スキル）も含めた尺度。それぞれのスキルを相手との関係性ごとにどの程度行使するかについて問う尺度。14項目からなり、それぞれの項目に対して、親密性が高い人（友人、恋人、家族など）が相手だった場合、中くらいの親密性の人（サークル・バイトで関わる仲間（友人などは除く）が相手だった場合、親密性が低い人（初対面の人や苦手な人など）が相手だった場合の3通りに対してその行動を行う度合いを4件法で尋ねた。

2 メタ認知尺度…石井（2007）。自らのコミュニケーションスタイルやコミュニケーション状況についてどれだけ理解しているかについて測定するもの。10項目からなり、それぞれの項目について自分にとってもあてはまる～全くあてはまらないまでの4件法で回答を求めた。

3 日常事態の情動経験傾向…Izard 他（1993）の Differential Emotions Scale (DES) の翻訳を用いた。DES での12情動に加えて今回は pride を付け加えた13情動について回答を求めた。

4 自尊感情尺度…Rosenberg の翻訳版を使用した。

## 3 結果

### DES の要約

まず従属変数となる DES について、今回は各情動を要約的に用いるため、最尤法プロマックス回転の因子分析を行った結果、2因子解を得た。前者をネガティブ情動、後者をポジティブ情動とし（驚きと軽蔑は除外）、さらに各群の中から基本的情動と自己意識的情動へ分けた4カテゴリーの各合算値を変数として使用した（Table 1）。

Table 1 DES 要約結果

ポジティブ基本的情動 ・喜び ・興味	ポジティブ自己意識的情動 ・誇り
ネガティブ基本的情動 ・悲しみ ・おそれ ・怒り ・嫌悪	ネガティブ自己意識的情動 ・恥 ・自己嫌悪 ・罪悪感 ・照れ

## 分析の方針

親密性（高，中，低）条件毎に，自尊感情と，各情動を従属変数として，接近スキル高低群×メタ認知高低群，距離化スキル高低群×メタ認知高低群での二要因の分散分析を行った。尚，メタ認知は，全ての条件で同一の変数を用いた。

### 3-1 親密性高条件

**自尊感情** メタ認知の主効果 ( $F(1,264)=6.62, p<.05$ ) が認められた。

**DES** メタ認知の主効果がポジティブ基本的情動 ( $F(1,268)=14.73, p<.01, \text{高}>\text{低}$ ) と，ポジティブ自己意識的情動 ( $F(1,256)=3.90, p<.05, \text{高}>\text{低}$ ) においてみられた。

接近スキルの主効果も，ポジティブ基本的情動 ( $F(1,270)=13.98, p<.01, \text{高}>\text{低}$ ) と，ポジティブ自己意識的情動 ( $F(1,272)=4.02, p<.05, \text{高}>\text{低}$ ) において認められた。距離化スキルの主効果はネガティブ自己意識的情動において認められた ( $F(1,271)=7.67, p<.01, \text{高}>\text{低}$ )。

親密性高条件ではメタ認知が高いほど自尊感情やポジティブな情動が高くなり，接近スキルの行使は単独でポジティブな情動に，距離化スキルの行使は単独でネガティブな情動に正の方向へ影響することが示されたが，各スキルとメタ認知との交互作用は認められなかった。

### 3-2 親密性中条件

**自尊感情** 接近スキルの主効果 ( $F(1,266)=7.37, p<.05$ ) が認められた ( $\text{高}>\text{低}$ )。

また，メタ認知と距離化スキルとの交互作用が認められた ( $F(1,262)=5.54, p<.05$ )。単純主効果の検定の結果，距離化スキル高群におけるメタ認知の主効果 ( $F(1,262)=10.85, p<.01, \text{高}>\text{低}$ )，メタ認知低群における距離化スキルの主効果 ( $F(1,262)=6.81, p<.01, \text{高}<\text{低}$ ) が有意であった。

**DES** メタ認知の主効果がポジティブ基本的情動 ( $F(1,266)=12.11, p<.01, \text{高}>\text{低}$ ) とポジティブ自己意識的情動 ( $F(1,254)=4.31, p<.05, \text{高}>\text{低}$ ) において見られた。接近化スキルの主効果は，ポジティブ基本的情動 ( $F(1,270)=5.88, p<.05, \text{高}>\text{低}$ ) とポジティブ自己意識的情動 ( $F(1,272)=5.28, p<.05, \text{高}>\text{低}$ ) において，またネガティブ自己意識的情動 ( $F(1,273)=7.03, p<.01, \text{高}<\text{低}$ ) において認められた。距離化スキルの主効果は，ポジティブ

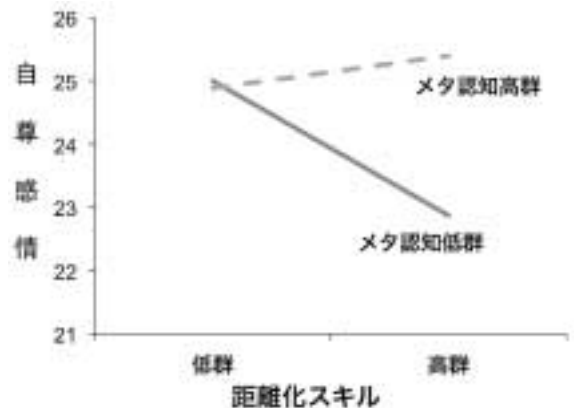


Figure 3 親密性中条件の自尊感情における距離化スキルとメタ認知の交互作用

自己意識的情動 ( $F(1,268)=6.29, p<.05, \text{高}>\text{低}$ )，ネガティブ基本的情動 ( $F(1,263)=5.15, p<.05, \text{高}>\text{低}$ )，ネガティブ自己意識的情動 ( $F(1,269)=13.45, p<.01, \text{高}>\text{低}$ ) において認められた。また，ネガティブ基本的情動におけるメタ認知と距離化スキル ( $F(1,263)=10.73, p<.01$ ) の交互作用が認められ，単純主効果の検定の結果，距離化スキル低群 ( $F(1,263)=4.77, p<.05$ ) と高群 ( $F(1,263)=6.01, p<.05$ ) 双方でメタ認知の主効果が認められたが，距離化スキル低群ではメタ認知高群>低群でネガティブ基本的情動が高くなるのに対して，距離化スキル高群ではメタ認知低群>高群でネガティブ基本的情動が上がることを示された。また，メタ認知低群における距離化スキルの主効果も有意であった ( $F(1,263)=14.38, p<.01, \text{高}>\text{低}$ )。

親密性中条件においては，メタ認知が高いほどポジティブな情動は高くなり，接近スキルを単独で多く行使するほど自尊感情やポジティブ情動は高く，ネガティブ情動は低くなると考えられる。距離化スキルに関しては単独で高く行使することが高いネガティブ情動にもポジティブ情動にも関係する結果となった。また，交互作用が認められたことから，距離化スキルを高く行使する群が同時にメタ認知も高く働かせると自尊感情は上がることと，メタ認知が低い群において距離化スキルを高く行使することが自尊感情の低下につながることが示された (Figure 3)。

### 3-3 親密性低条件

**自尊感情** メタ認知の主効果 ( $F(1,263)=5.44, p$

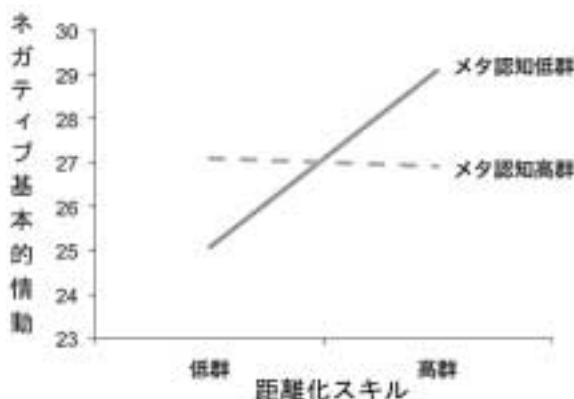


Figure 4 親密性低条件のネガティブ基本的情動における距離化スキルとメタ認知の交互作用

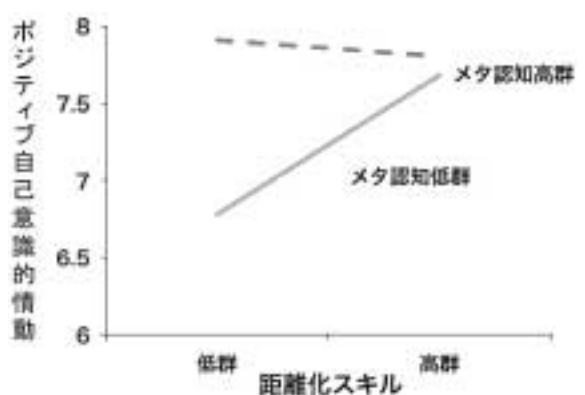


Figure 5 親密性低条件のポジティブ自己意識的情動における距離化スキルとメタ認知の交互作用

$p < .05$ ) と、接近スキルの主効果 ( $F(1, 266) = 4.34$ ,  $p < .05$ ) が認められた (いずれも高 > 低)。

**DES** メタ認知の主効果がポジティブ基本的情動 ( $F(1, 267) = 13.30$ ,  $p < .01$ ) とポジティブ自己意識的情動 ( $F(1, 255) = 6.89$ ,  $p < .01$ ) において認められた (いずれも高 > 低)。距離化スキルの主効果はネガティブ基本的情動 ( $F(1, 264) = 5.83$ ,  $p < .05$ , 高 > 低) とネガティブ自己意識的情動 ( $F(1, 270) = 7.84$ ,  $p < .01$ , 高 > 低) において認められた。接近化スキルの主効果は認められなかった。また、メタ認知と距離化スキルの交互作用がポジティブ自己意識的情動 ( $F(1, 269) = 5.33$ ,  $p < .05$ ) とネガティブ基本的情動 ( $F(1, 264) = 6.97$ ,  $p < .01$ ) において認められた。単純主効果の検定の結果、ポジティブ自己意識的情動に関しては距離化スキル低群におけるメタ認知の主効果 ( $F(1, 269) = 12.42$ ,  $p < .01$ , 高 > 低) と、メタ認知低群における距離化スキルの主効果 ( $F(1, 269) = 7.92$ ,  $p < .01$ , 高 > 低) が認められた。

ネガティブ基本的情動については、距離化スキル高群におけるメタ認知の主効果 ( $F(1, 264) = 4.14$ ,  $p < .05$ , 高 < 低) と、メタ認知低群における距離化スキルの主効果 ( $F(1, 264) = 11.75$ ,  $p < .01$ , 高 > 低) が有意であった。

親密性低条件においては、メタ認知が高い程自尊感情やポジティブな情動の高さに関連し、接近スキル行使が単独で高い程自尊感情が高くなると示された。距離化スキルに関しては高く行使することがネガティブな情動の高さに影響していた。交互作用についてはメタ認知と距離化スキルとの間でのみ認められ、親密性

中条件と同じく距離化スキルを高く行使する群が同時にメタ認知も高く働かせるとネガティブ情動は下がることと、メタ認知が低い群において距離化スキルを高く行使することがネガティブ情動の高さにつながることを示された (Figure 4)。また、交互作用はポジティブ情動にも認められ、メタ認知が高く、距離化スキルが低い群のポジティブ情動が高く、またメタ認知が低ければ距離化スキルが高い程ポジティブ情動が高いことが示された (Figure 5)。

#### 4 考察

本研究の目的は、メタ認知対人的接近スキルや距離化スキルが社会的適応の指標に対してどのような関係を持つのか検討することであった。結果として、相手との関係性条件によって、自尊感情や各情動における各スキルやメタ認知との関係には違いが見られた。

まずメタ認知について、主効果が自尊感情やポジティブ情動において有意であった。状況の覚知や自らのコミュニケーションスタイルへの認知が主体の well-being に良い影響を及ぼすことが示されたといえる。

接近スキルも、自尊感情やポジティブ情動へは正の方向、またネガティブ情動へは負の方向で主効果が示されたが、予測していたメタ認知との交互作用効果は認められなかった。この結果から、接近スキルは、状況の把握が行われていなくても単独での行使それ自体が適応的と考えられるかもしれない。ただし、先述した非行少年らの調査が指すように、対人的接近スキルが余りに高くなることは適応的とはいえないだろう。

今回社会的適応の指標となっているのはいずれも主観的な適応性であり、尺度上での接近スキルの高さが、実際場面でのどのような振る舞いや、他者からのどのような評価につながるかについては不明である。このスキルについては、今後別の指標からの検討も必要だと考えられる。

距離化スキルについては、大体においてネガティブ情動へ正の方向での主効果が認められた。このスキルを単独で行使することは単なる対人的撤退を意味し、望ましくないということが示されたのかもしれない。ただし、親密性中条件において距離化スキルはポジティブ情動へ影響を与えていた。親密性中条件の相手として教示したサークルやアルバイトに関わる仲間、というのは友人や家族程の親しみは感じていないものの、関係を維持しなければならないいわゆる「半知り」(笠原, 1977) の関係にあたり、また多くの場合何らかの共有した課題を遂行しなければならない相手となる。そのような相手に対して距離化スキルを行使することがやむない場面というのは容易に想像され、距離化を行うことが行為主体にとって良い影響を及ぼす可能性が考えられる。

また距離化スキルは、親密性中、低条件ではメタ認知との交互作用効果が認められていた。単独ではネガティブに働くこのスキルは、高いメタ認知に裏付けられた上での行使をして初めて効果を持つのかもしれない。一方、親密性低条件で見られた交互作用にはメタ認知が高い群において距離化スキルが低いとポジティブ情動の高さにつながることが示された。これは解釈が難しいものの、初対面等の相手に対して取って距離をとるスキルを減じる、距離化スキルの「抑制」が効果を奏することを意味するのかもしれない。

これらの結果からは距離化スキルが状況や個人内の要因によって、社会的適応にネガティブにもポジティブにも働きうることが予測できる。つまり、このコミュニケーションスタイルそれ自体に予め善し悪しが埋め込まれているわけではない可能性が示唆される。

社会的スキルとは、通状的に普遍的技術が存在するのではなく、それ自体は正負どちらでもありうるコミュニケーションスタイルに、個人内外の要因が加わって初めて「スキルにする」ことができるとも考えられる。今回はその状況要因として関係性条件、個人内要因としてメタ認知の要因を取り上げたが、今後その他の要因からの検討や、スキルをスキルたらしめるものを明らかにする必要があるといえる。

(指導教員 遠藤利彦准教授)

## 引用文献

- 相川充 (1999). 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, 14, 95-105.
- 相川充 (2000). 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学—20 サイエンス社
- 相川充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993). 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究 —孤独感と社会的スキルとの関係— 社会心理学研究, 8, 44-55.
- Argyle, M. (1967). *The psychology of interpersonal behavior*. Penguin books. (M. アーギル (著) 辻正三・中村陽吉 (訳) 1972 対人行動の心理 誠信書房)
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1978). *Politeness : some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Canary, D. J., Spitzberg, B. H., & Semic, B. A. (1998). *The Experience and Expression of Anger in Interpersonal Settings* In Andersen, P. A., & Guerrero, L. K. (Eds). (1998). *Handbook of communication and emotion : Research, theory, applications, and contexts*. (pp. 189-213). San Diego, CA, US : Academic Press.
- 大坊郁夫 (2008). 社会的スキルの階層的概念 対人社会心理学研究, 8, 1-6.
- Depaulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. (1996). Lying in everyday life. *Journal of personality and Social Psychology* 70, 979-995.
- Dodge, K. A. (1986). "A social Information processing Model of Social Competence in Children In M. Perlmutter (Ed.), *Minnesota symposium in child psychology* (pp. 77-125). Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum.
- Doll, E. A. (1953). *Measurement of social competence : A Manual for Vineland Social Maturity Scale*. American Guidance Service.
- Hall, W. E. & Gaedert, W. (1960). Social skills and their relationship to scholastic achievement. *Journal of Genetic Psychology*, 96, 269-273.
- 原田純治 (1988). 援助手控えの援助性認知に関わる要因に関する研究 長崎大学教育学部 教育科学研究報告, 54, 75-85.
- Hargie, O. (1986). Communication as skilled behavior. In Hargie, O. (Eds) *A Handbook of Communication skills*. Croom Helm.
- 畑中美穂 (2003). 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響 心理学研究, 74, 95-104.
- Holt, R. R. (1970). On the interpersonal and intrapersonal consequence of expressing or not expressing anger. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 35, 8-12.
- 堀毛一也 (1994). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- 五十嵐祐 (2002). CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性 社会心理学研究, 17, 97-108.
- 石井佑可子 (2006). 社会的スキル研究の現況と課題 —「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52, pp. 347-359.
- 石井佑可子 (2007). "メタ・ソーシャルスキル" 測定尺度作成の試み 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 286-298.
- 石井佑可子・新堂研一 (2011). 在宅非行少年における社会的スキルの様相—メタ認知, 対人的距離化スキルの観点から— 臨床

- 心理学, 61, 65-76.
- 石井佑可子・新堂研一・遠藤利彦 (2007). 在宅非行少年における社会的スキル行使の様相 (1) —対照群との比較から— 日本社会心理学会第48回大会／早稲田大学／日本社会心理学会第48回大会論文集 pp. 480-481.
- Izard, C. E., Libero, Putnam, & Haynes (1993). Stability of Experiences and Their Relations to Traits of Personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64 847-860.
- Jordan, J. M. & Roloff, M. E. (1997). Planning skills and negotiator goal accomplishment : The relationship between self-monitoring and plan generation, plan enactment, and plan consequences. *Communication Research*, 24, 31-63.
- 笠原嘉 (1977). 青年期—精神病理学から 中央公論社
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 (2004). 関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響 電子情報通信学会技術研究報告, 104, 1-6.
- Kuppens, P., Realo, A., & Diener, E. (2008). The role of positive and negative emotion in life satisfaction judgement across nations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 95, 66-75.
- Lyubomsky, S., King, L. A., & Diener, E. (2005). The benefits of frequent positive affect. *Psychological Bulletin*, 131, 803-855.
- Murai, J. (2000). Deception in everyday life of Japanese young adults. *The Japanese journal of personality* 9, 56-57. (in Japanese with English title)
- Segrin, C. & Abramson, L. Y. (1994). Negative Reactions to Depressive Behaviors : A communication Theories Analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 655-668.
- Snyder, M. (1974). Self Monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- Snyder, M. (1987). *Public appearances/public realities : The psychology of self-monitoring*. (New York : Freeman)
- Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (1988). *Handbook of interpersonal competence research*. Springer.
- Tedeschi, J. T. (1983). Social influence theory and aggression. In Geen, R. G. & Donnerstein (Eds.), *Aggression : Theoretical and empirical reviews. Vol 1. Theoretical and methodological issues*. New York : Springer-Verlag. (pp. 5-20)
- Trower, P. (1995). *Adult social skills : State of the art and future directions*. In O'Donohue, W. & Krasner, L (Ed) *Handbook of psychological skills training : Clinical techniques and applications* (pp. 54-80)
- 和田実 (1991). 対人有能性に関する研究 —ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成— 実験社会心理学研究, 31, 49-59.
- Whitehouse, R., Chamberlain, P. & O'brien, A (2001). Increasing social interactions for people with more severe learning disabilities who have difficulty developing personal relationships. *Journal of Learning Disabilities*, 5 209-220.
- Witt, L. A. & Ferris, G. R (2003). Social skill as Moderator of the Conscientiousness-Performance Relationship : Convergent Results Across Four Studies. *Journal of Applied Psychology*, 88 809-820.